

ゴーゴリの『ウクライナもの』について

はじめに

19世紀の文豪ニコライ・ゴーゴリは、『鼻』や『検察官』といった文学作品を著し、ロシアのリアリズム文学の祖と言われている。だが、彼の名を世に知らしめた作品は『ディカーニカ近郊夜話』という二巻の連作短編集で、それはウクライナを舞台にした異国情緒あふれる著作だった。

実はゴーゴリはウクライナ生まれである。『ディカーニカ近郊夜話』や『ミールゴロド』といった、いわゆる「ウクライナもの」を書いたのも、彼の出自によるところが大きい。

ゴーゴリとウクライナの関連を調べることは、ロシアとウクライナの関係論を論じる上で興味深いと言える。

1. ゴーゴリの出自

ゴーゴリは、1809年にポルタワ地方のソロチンツィの、小地主の家に生まれた。当時、ウクライナはロシア帝国の一部である。本名はニコライ・ワシーリエヴィッチ・ゴーゴリ=ヤノフスキーで二重姓を持つ。そもそもこのゴーゴリという苗字自体がウクライナ式で、もし彼がロシア人であればゴーゴレフとなっていたはずである。父親は劇作家で、ウクライナ語の戯曲を残していた。

2. 創作活動

1828年に、サンクトペテルブルグに移り住むと、初の文学作品『ガンツ・キューヘルガルテン』を発表した。しかしかなり不評で、ショックを受けたゴーゴリは売れ残っていた本を集めて全て焼いてしまった。

次に発表したのが『ディカーニカ近郊夜話』である。当時、ロシアではロマンチズムの影響下に、ウクライナの言語や文化、民族、フォークロアの研究

が進み、ウクライナ的なものが流行していた。ゴーゴリが『ディカーニカ』を書いたのも、この流れをくんでのことであった。ゴーゴリは本作を書くために、故郷の母に手紙を書き、ウクライナのフォークロアや習俗、伝統などについての資料をよこすように頼んでいる。

それからいくつか、都会を舞台にした物語を書いたあと、再び故郷の地を舞台にした『ミールゴロド』を発表した。この『ミールゴロド』と『ディカーニカ』を合わせて、ゴーゴリの「ウクライナもの」と称され、他の都会を舞台にした「ペテルブルグもの」とは対比されている。

3. それぞれの作品の特徴

『ディカーニカ近郊夜話』は全二巻からなる連作短編集で、ウクライナの田舎を舞台にしている。ストーリーは喜劇的で、登場人物もコミカルである。それに伝説や伝承を元にした、非現実的・怪奇的で、幻想的な世界が入り乱れる。本自体は、ルーディ・パニコーという養蜂師が書いたという体裁をしている。

『ミールゴロド』も同じく短編集で、前作『ディカーニカ』の続きとみなされている。ただし、パニコーという語り手がいるわけではなく、物語も田舎のみならずキエフを舞台にしたものや歴史ものなど様々で、ページ数も短いものや長いもので差があり、それぞれが作品としての独立性を強めている。

ところで、ここに描かれているウクライナ人が、実像とどれほど一致しているかについてはやや疑問もある。ウクライナ人の文芸批評家アンドレイ・ストロジェンコは「ウクライナでは若者が酔っぱらうほど飲むことはない」「若いコサックがバンドウーラを弾くことはない」¹と指摘した。作家ウラジーミル・ナボコフも「ここに登場するコサックたちはいずれも純然たる虚構であって、ウクライナ風の仮装をしたコルネイユのシッドとそのスペイン人たち（あるいは、ヘミングウェイのスペイン人たちでも同じこと）とも言うべきものである」²と評した。やはり、ロマンチックな作風の中で、実像と一致しない、かなりステレオタイプ化されたウクライナ人が描かれたという可能性がある。しかし、後

¹ *И. Золотусский, Гоголь : Жизнь замечательных людей. Москва : «Молодая гвардия», 1979. сс.125-126.*

² ウラジーミル・ナボコフ、青山太郎訳『ニコライ・ゴーゴリ』172 ページ。

で述べるように、ゴーゴリの作品に現れた（おそらく）不正確なウクライナ人像が、ウクライナの民族主義を高める上で一役買っているのは注意すべきと考える。

4. ゴーゴリのウクライナ文学に対する観方

ゴーゴリはウクライナ語による著作をほとんど残していない。

これは、同時代のタラス・シェフチェンコとは正反対である。シェフチェンコは詩人で、ほとんどの作品をウクライナ語で書いている。当時のロシア政府はウクライナ人の中でナショナリズムが育つのを警戒しており、彼らを危険分子とみなしていた。そのため、シェフチェンコも一度は逮捕され、ウラル地方で10年の兵役を課せられるという苦難を舐めている。

だが、ゴーゴリはシェフチェンコのような一面的なウクライナ民族主義に偏ることは無かった。ロシアとウクライナのどちらにも肩入れすることなかった。特に後年になると、ロシア語という、当時のロシア帝国で正当な地位を持っていた言語を使うことに、意味を見出すようになった。つまり、ウクライナやロシアという一つの地域を鼻屑するのは、ゴーゴリからしてみれば、狭隘な地方主義にすぎない。ロシア語という、スラブ人に普及する共通の言語でもって、真実や美を描く芸術を行うことがゴーゴリにとって重要であった。

やがてゴーゴリは、『ディカーニカ』についても、未熟な頃に書いた秀作という程度にとらえるようになった。

このようにゴーゴリがむしろロシア語で書くことを優先していたのは、当時はウクライナが国家としての地位を持っておらず、そもそもウクライナの熱い民族主義が彼の心に萌すほどの状況でもなかったことも関係したかもしれない。

5. 後の時代、「ウクライナもの」はどう受け入れられたか

ソ連やロシアでは、ウクライナものの作品をもとに、オペラや演劇が多く作られ、映画化・アニメーション化されている。

『ディカーニカ近郊夜話』からは、「五月の夜、または身を投げた女」をリムスキー＝コルサコフが、「ソロチンツィの定期市」をムソルグスキーがオペラにした。どちらも国民学派と呼ばれる作曲家で、ロシアものを作曲していたこと

から、彼ら自身がウクライナに対しどのような見方をしていたか自体が興味深い。

これらは現在でもロシアの劇場のレパートリーに入っている。そのほかにも演劇として「五月の夜」や「生誕祭前夜」が上演されている。

私がロシアに滞在中、「五月の夜」のオペラをモスクワ音楽劇場で鑑賞した際は、ウクライナものであることを強調するような演出が見られた。例えば、序曲を演奏中は、舞台上のスクリーンにウクライナの風景の映像が映し出された。また、場内アナウンスは英語・ロシア語に加えてウクライナ語でも行われた。ロシアにおいてウクライナものを上演するということは、例えばイタリアやスペインのオペラを上演することとは違う意味を持っているようである。

ウクライナという枠組み自体は非常に曖昧であるといえる。北部のロシアとは異なる文化を持っていながら、長い間ロシア帝国という同じ国家の中に含まれており、ウクライナとロシアは常に人が往来していた。ウクライナ語という言葉はあるものの、それが単なるロシア語の方言という程度にしか見なされないこともしばしばある。現在のウクライナでも、ウクライナ語に加えてロシア語が公用語としての地位を持っている。

そもそも、ゴーゴリの書いた『ディカーニカ』はロシア語による作品であり、このことはウクライナとロシアの曖昧な関係を象徴しているように思える。『ディカーニカ』は、ウクライナ出身の作家が書いた、れっきとしたウクライナの物語でありながら、その言語はロシア語である。このことが、ウクライナとはロシア語の知識によってアクセスできる、非常に身近な異文化であるという意識を、ロシア人に持たせているのではないかと考えられる。(ちなみに、日本の本州と沖縄を例に何か比較できるかもしれない。)

では、とりわけロシア人の中で、ウクライナに対する強い親近感ないし親戚を見るような目があったとした場合、ウクライナ人の特にナショナリストたちはどのように考えているだろうか。

『ミールゴロド』の一篇「タラス・ブーリバ」は、2009年に映画化された。しかし映画の中でザポロージェエのコサックたちがロシア人として描かれているといった内容が、特にウクライナの批評家からの批判を呼んだ。

このように、ウクライナの民族主義を強く抱いている人々の中には、『ディカ

一ニカ』などの作品内の人物をウクライナ人であると明確に定義し、ゴーゴリをロシアの作家というよりは、むしろウクライナの作家としてとらえることがある。

ここで、ゴーゴリはロシアの作家か、ウクライナの作家か、という所有権論争が生じる。そもそもどちらのものかという議論自体は無意味で、この論争にも明確な答えはない。しかし、ロシア文学史の中でゴーゴリが果たした大きな役割を考えれば、ゴーゴリを「ロシア文学史上の偉大な作家」としてとらえることが、現時点ではおそらく妥当である。

しかし、ウクライナ語による文学（＝ウクライナ文学）という枠組みがあるとした場合、ゴーゴリはどのような点で画期的であったか、後のウクライナの作家たちにどのような影響を与えたかというような文学史的な意義を考える必要はある。そうすれば、場合によっては、ウクライナ文学におけるゴーゴリという、新しい視点ができるであろう。

参考文献

青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』河出書房新社，1986

ウラジーミル・ナボコフ、青山太郎訳『ニコライ・ゴーゴリ』紀伊國屋書店，1973

太田正一，中村喜和，青山太郎訳『ゴーゴリ全集 1』河出書房新社，1977

服部典三，小平武訳『ゴーゴリ全集 2』河出書房新社，1977

И. Золотусский, Гоголь : Жизнь замечательных людей. Москва : «Молодая гвардия», 1979.

Фільм «Тарас Бульба»: мистецтво на службі... (2016年1月15日 15:36 アクセス) <<http://www.radiosvoboda.org/content/article/1604982.html>>